

聖女ジャンヌ・ダルクの文学

——シャルル・ペギー『ジャンヌ・ダルクの愛の神秘』を読む——

北 原 ル ミ*

はじめに

表題に掲げました¹「聖女ジャンヌ・ダルク」という表現に、違和感を覚える方もおられるのではないのでしょうか。多くの方は「聖女」という言葉に、やさしさ、穏やかさ、平和、癒し、包容力などのイメージをもたれているのではないかと推察します。一方、「ジャンヌ・ダルク」といえば、まず男まさりの女傑、祖国を救う英雄として剣をふりかざす荒々しいイメージ、血なまぐさい戦争のイメージが立ち現れるでしょう。実際に、現在のフランスで「ジャンヌ・ダルク」というと、「外国人をフランスから追い出せ」などというスローガンをかかげる極右のグループが、自分たちの女神のように宣伝していることが思い出されます。また、フランス中、ど

* 金城学院大学文学部講師

1 本稿は、金城学院大学キリスト教センター主催のもと、2008年12月5日に同タイトルで行われた口頭発表の原稿に修正を加えたものである。

の町に行ってもジャンヌの銅像があるのですが、その多くは馬に乗り、剣を振りかざした姿です。平和や癒しを感じさせるはずの「聖女」と、戦や剣と切り離せない「ジャンヌ・ダルク」、いかにして両者が、キリスト教の文脈において一体となりうるのか。文学はいかにそれを表現するのか²。今回は、フランスの詩人シャルル・ペギーの作品『ジャンヌ・ダルクの愛の神秘』を、一つの例としてご紹介させていただくことで、このような問題について考えてみたいと思います。

それではまず、予備知識として、歴史上のジャンヌ・ダルクについて簡単におさらいしておきましょう。ジャンヌ・ダルクは1412年、英仏百年戦争と呼ばれる長い戦乱の末期に、ドンレミ村の農家に生まれます。イギリス軍がフランスの半分以上を制し、世情は安定せず、兵隊たちは戦闘のないときには、村を襲い、家畜を奪い、畑を荒らす日常でした。その様な暮らしのなか、ジャンヌは1425年、ちょうど十三歳の夏に「声」を聞きはじめます。ジャンヌはのちにこれを神の「声」と言ったり天使の「声」と呼んだりします。「声」はジャンヌが十六歳になる頃、フランスを救うために立ち上がりなさいと語りかけるようになりました。その頃には、イギリス軍がいよいよフランス全土を掌握するため、地理的に要の位置にある、ロワール川沿いの町オルレアンを包囲していたのです。ジャンヌの「声」は、このオルレアンの包囲を解くよう、そしてパリを追われてロワール川の近くの城を転々としているフランスの王太子シャルルを助けるようにと、ジャンヌをせきたてます。ジャンヌはついに根負けし、立ち上がりました。そして1429年5月、「イエス・マリア」の旗をかかげたジャンヌとともに、シャルルの軍はイギリス軍による包囲からオルレアンの町を解放

2 ジャンヌ・ダルクを扱った様々な文学作品の例については、拙論「ジャンヌ・ダルク幻想——大作家にとっての〈処女〉——」（『金城学院大学論集人文科学編』第5巻第2号、2009年3月掲載予定）において取り上げた。

することができたのです。この華々しい勝利のおかげで、王太子シャルルは、無事に戴冠式をとり行い、正統なフランス国王を名乗ることができるようになりました。しかしジャンヌはまもなく敵側に捕らえられ、1431年5月、イギリス軍の支配する町ルーアンにて十九歳で火刑に処されます。異端裁判で、ジャンヌの聞いていた「声」が神から来たものではない、ジャンヌの信仰は間違っただけだったという判決が下されたのです³。ところが、その判決は二十五年後の1456年、いわゆる名誉回復裁判によってくつがえされ、つまりジャンヌの信仰は間違っただけではなかったという新たな判決が下ります⁴。さらに約五百年ののち、1909年、ローマ・カトリック教会によってジャンヌは「福者」という聖人に順ずる位にあげられ、また1920年には「聖人」の位にまで上りつめ、これを祝う盛大な式典が催されたのでした⁵。

今回取り上げる詩人シャルル・ペギーの作品は、ジャンヌが教会の「聖女」となる以前、1910年に発表されたものです。さて、このペギーの方は、どのような人物でしょうか。日本ではごく一部の読者にしか知られていま

3 この裁判記録の邦訳は、『ジャンヌ・ダルク処刑裁判 新装版』(高山一彦編訳)、白水社、2002(1984)。

4 この裁判の記録の概要も、邦訳で読むことができる。『ジャンヌ・ダルク復権裁判』(レジーヌ・ベルヌー編著、高山一彦訳)、白水社、2002。

5 この五百年間のフランスにおけるジャンヌ・ダルク評価の変遷に関しては、ミシェル・ウィノック(渡辺和行訳)「ジャンヌ・ダルク」(ピエール・ノラ編、谷川稔監訳『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史——』第三卷、岩波書店、2003に所収)参照のこと。また、後世のジャンヌ解釈の一つとしてペギーの作品も取り上げ、かつ日本におけるジャンヌ・ダルク受容等についても記されている文献として、高山一彦『ジャンヌ・ダルク——歴史を生き続ける「聖女」』(岩波新書、2005)がある。

せん⁶。手短にご紹介させていただきます。ペギーは、ジャンヌに救われたオルレアン（フランス中部の都市）の町で、1873年に生まれました。オルレアン（フランス中部の都市）の町はジャンヌへの感謝を忘れず、五百年のあいだ祝い続けてきましたから、子どものころから、いたるところにジャンヌを記念するものがあふれ、またジャンヌと実際に会った人々の子孫がおり、といった環境のなかで育ったわけです。生まれは貧しく、椅子の張り替え仕事で生計を立てる母ひとり、子ひとりの家庭でしたが、学業優秀だったため、奨学金を得て、超エリート校であるパリの高等師範学校に入学することができました。思想的に社会主義の強い影響を受け始めたこのころ、一年休学して故郷オルレアンに戻り、戯曲三部作『ジャンヌ・ダルク』を執筆します。まず歴史文献をよく読みこんだ上で、演劇のかたちでジャンヌを主人公にとりあげたのです。しかしこの作品は、ほとんど注目されませんでした。パリに戻ったペギーは、社会評論の分野で、社会のさまざまな不正と戦うための執筆活動をはじめます。とりわけ、当時のフランス社会を揺るがしていたドレフュス事件に飛び込み、「フランス社会党の父」と後に呼ばれるジャン・ジョレスをも

6 1938年に河出書房より刊行された『廿世紀思想』（石原純、三木清ほか編）の第四巻「神秘主義・象徴主義」において、シェストフ、シュペングラー、ゲオルゲ、リルケと並んでペギーも紹介され、1942年には、平野威馬雄の訳で『半月手帖』が昭森社より刊行された。その後1970年代後半から80年代前半にかけて、ペギーの邦訳が続けて刊行されている。磯見辰典訳『われらの青春——ドレフュス事件を生きたひとりと』（中央出版社、1976年）、山崎庸一郎訳『歴史との対話——クリオ』（中央出版社、1977年）、島朝夫訳「ジャンヌ・ダルクの愛の神秘」（『キリスト教文学の世界』第3巻所収、主婦の友社、1978年）、猿渡重達訳『希望の讃歌——「第二徳の秘義の大門」』（中央出版社、1978年）、岳野慶作解説『悲惨と嘆願』（中央出版社、1979年）、大野一道訳『もうひとつのドレフュス事件——社会主義への洞察』（新評論、1981年）、岳野慶作訳『ジャンヌ・ダルクの愛の秘義』（サンパウロ社、1984年）。現在では、最後の『ジャンヌ・ダルクの愛の秘義』以外は、すべて絶版となっている。

巻き込みつつ、ドレフュス擁護のための論陣を張ったことがよく知られています。1900年には、月に二回、つまり隔週で発行する雑誌『半月手帖』を創刊しました⁷。

しかし、1907年に突然、ペギーはカトリックの信仰への回帰をごく親しい友人に打ち明けます⁸。この点については説明が必要ですが、当時のフランスでは、新しい社会主義思想を奉ずる人々は、一般的に、伝統的なカトリック教会とは敵対する立場をとり、両者の対立は深刻でした。社会主義者としてペンで戦っていたはずのペギーが、カトリックに戻るということは、友人たちや読者からすれば、裏切り行為にも等しいものでした。だからこそ、1910年に発表された『ジャンヌ・ダルクの愛の神秘』は、激しい非難と称賛にさらされます。はっきりとキリスト教への熱い想いが見て取れるこの作品は、これまでの味方からは非難を、これまでの敵からは称賛を受けることになったのでした。ただし、ペギー本人にとっては、自分自身の社会主義を捨ててカトリックに鞍替えしたというつもりはありませんでした。実は、この作品は、まったく新しいものではなく、学生時代に書いた例の戯曲『ジャンヌ・ダルク』の第一部「ドンレミ」をもとに、新たな言葉を加筆したものでした。膨大な量の加筆でしたが、ペギーは昔書いたテキストを一語たりとも削らずに残したのです。この作品を機に、

7 この『半月手帖』に連載されていた作品のなかには、日本でもよく読まれたロマン・ロランの『ベアトール・ヴェンの生涯』（1903）や『ジャン・クリストフ』（1904-1912）などもある。

8 その経緯で生じた混乱を一友人の視点から生々しく記録した文章が、ライサ・マリタン（水波純子訳）『あるカトリック女性思想家の回想録——大いなる友情——』（講談社学術文庫、2000年）に収められている。

詩人としての才能が開花し、次々と詩作品を発表しました⁹。1914年の第一次世界大戦勃発直後、四十一歳の若さで戦死しますが、その数年のあいだに書かれた詩作品にはペギーのキリスト教信仰があふれんばかりに流れ、またほとんどの作品になんらかのかたちでジャンヌ・ダルクの名が刻み込まれています。

今回とりあげますのは、まさにこのペギーの信仰告白とも言える1910年の『ジャンヌ・ダルクの愛の神秘』です。邦訳は、島朝夫訳と岳野慶作訳の二種類がありますが¹⁰、これ以降の引用は双方により、また多少私自身による語句の修正も加えた文となります。

作品の場面は、1425年、場所はジャンヌの故郷のドンレミ村です。歴史上のジャンヌが「声」をききはじめる直前に設定されています。登場人物はわずか三人。十三歳のジャンヌ、「ジャネット」という呼び名は「ジャンヌちゃん」とでもいう意味になります。そしてさらに幼い十歳の少女オーヴィエット。それから二十五歳の修道女ジェルヴェーズです。アクションらしいアクションはほとんどなく、丘の上で羊の番をしながら糸をつむぐジャンヌが、ひとりで祈り神さまに呼びかけているところに、まずオーヴィエットが現れ、オーヴィエットが去るとジェルヴェーズが現れ、それぞれジャンヌと対話をするだけです。しかし、その対話はなんという対話でしょうか。十三歳のジャンヌは、いつまでもつづく戦争、滅びていく

9 『第二美德の神秘の大門』(1911)、『罪なき幼児の神秘』(1912)、『聖ジュヌヴィエーヴとジャンヌ・ダルクのつづれ織り』(1912)、『ノートル・ダムのつづれ織り』(1913)、『イヴ』(1913) など。

10 島朝夫訳「ジャンヌ・ダルクの愛の神秘」(『キリスト教文学の世界』第3巻所収、主婦の友社、1978年)、岳野慶作訳『ジャンヌ・ダルクの愛の秘義』(サンパウロ社、1984年)。

かのような世界を日々目の当たりにして、悩み苦しんでいます。ジャンヌの苦しみを感じ取る、あるいは理解するオーヴィエットとジェルヴェーズは、ジャンヌに対しそれぞれ自分の考え方、生き方をぶつけてきます。二人と対話することによって、ジャンヌの考え方、生き方も明確化されてゆくのです。三者三様の立場の対比に焦点を当て、この過程を追ってゆきたいと思います。

1. 現実の悲惨：ジャンネットの疑問

1-1. ふたりの飢えた孤児

真夏の朝、ゆったりと蛇行するムーズ川を見下ろす丘の上で、羊の番をしながら糸をつむぐジャンヌがひとり、神へ祈りを捧げる場面からはじまります。十三歳のジャンヌは「天にまします我らの神よ」の祈りを唱えた後で、その祈りの文句一つ一つをとりあげて神へ疑問を投げかけます。神よ、あなたのみ名はとうとまれるどころではありません、み国はきたるところではありません、み旨は行われるところではありません、日々の糧は与えられるところではありません、という調子です。ジャンヌはなにが不満なのでしょう。ジャンヌには現実の悲惨があまりにはっきりと見えてしまうのです。お祈りをしても、お祈りをすればするほど、あまりに祈りの内容とかけ離れた現実が見えてしまいます。たとえば、つい先ほど、おなかがすいたと泣き叫びながら子犬のように駆けてきた、二人の孤児の姿です。少女ジャンヌは自分の持っていたパンを全部ふたりにやっしまいました。後から来たオーヴィエットは、さっきその子どもたちとすれ違ったばかりでした。ふたりはパンをもらって喜んでいとオーヴィエットに言われても、ジャンヌはいっそう切なくなるばかりです。

ジャンネット：ふたりの子どもは飢えの待っている道に出て行っただ。ほ

こりの中に、泥のなかに、飢えのなかに、未来のなかに。嘆きのなかに。未来の苦悩のなかに。だれが与えるでしょう、神さま、毎日のパンをだれがふたりに与えるでしょう。ふたりはその反対に、嘆きのなかに、毎日の飢えのなかを歩いて行くでしょう。ふたりは、笑いながら、まだ泣いていたの。そして、泣きながら笑っていたの。ちょうど、ひとすじの太陽の光線がその涙を通っているようだったの。ふたりが気にかけていなかった大粒の涙がパンの上をすべり落ちていたの。それは、ちょうど太陽が戻ったときの雨の最後のしずくのようなものだったの。ふたりは、そのパンの上にバターを塗ったようになった涙の残りを食べていたの。わたしたちの一日の努力がなんになるでしょう。わたしたちの慈善がなんになるでしょう。それに、わたしはいつもいつも与えることはできません。わたしは全部を与えることはできません。わたしはすべての人に与えることはできません。わたしは通りかかる人々に私のお父さんのパンを全部与えることはできません。そうしたからと言って、飢えた人々の群衆のなかになんの足しになるでしょう。（かの女は知らず知らずのうちに糸をつむぐのを止める。）偶然ひとりの子どもに食べ物を与えても、疲れることのない戦争は、毎日、負傷者、病者、見捨てられた者を、何百人もつくり出します。わたしたちの努力はみな無駄です。わたしたちの慈善は無駄です。戦争ほど苦しみをつくるのに強力なものはありません。ああ、戦争はのろわれなければなりません。戦争をフランスの地にもたらした人々のはのろわれなければなりません¹¹。（下線は引用者、以下同様。）

自分の慈善行為が「焼け石に水」にすぎないという酷い現実を、ジャンヌ

11 *Le Mystère de la charité de Jeanne d'Arc*, in *Œuvres poétiques complètes*, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1975 (1957), p. 382-383, 岳野, p. 65-66, 島, p. 135.

は知っています。抽象的な知識として知っているのではなく、ひりひりするほどにその現実を感じているのです。

1-2. 靈魂の滅び、すなわち絶望

しかし、ジャンヌが感じ取る現実の悲惨は、飢えや病気といった身体の問題にとどまりません。恒常的な戦争状態によって、人々の靈魂が破滅へ導かれること、これこそジャンヌがもっとも恐れる悲惨です。

(ジャネット：) 強い人々は、殺す人々は、自分の行う殺人によって靈魂を滅ぼします。それに殺された人々は、弱い者は、殺されることによってその靈魂を滅ぼします。なぜなら、自分たちが弱いのを、自分たちが傷つけられたのを見、いつも相変わらず弱く、いつも相変わらず不幸で、いつも相変わらず負け、いつも相変わらず殺されるのを見ると、この不幸な人々はその救いに絶望するからです。それも、神のいつくしみに絶望するからです¹²。

靈魂の破滅、とは「心が死んでしまうこと」とも言えます。魂の死、心の死が引き起こされる事態まで見据えているジャンヌは、絶望という地獄へ落ちていく人々の存在から、目をそらすことができません。

1-3. 神への問い

ジャンヌが、「地獄へ落ちる人々」を裁く立場から見ているわけではないのは、明らかです。ジャンヌは「靈魂を滅ぼす人々」を責めるのではなく、人々をこうした状況に放置するかのような神に対して、激しく問いかけるのです。

12 同上, p. 383-384, 岳野, p. 68, 島, p. 136.

(ジャネット：) それでは、あなたがあなたの御子を送られたのは無駄だったということなののでしょうか。あなたの御子は無駄に苦しめたということなののでしょうか。そして、無駄に死なれたということなののでしょうか。あなたの御子をご自分をいけにえにささげたのは無駄に終わり、わたしたちは毎日あなたの御子をあらたにいけにえにしなければならぬのでしょうか¹³。

神の御子イエス・キリストが、わざわざ人間として苦しみ、十字架にかけられたのは人類を救うためでありました。ところが、これほどまでに救われない人類が地上にあるということは、イエス・キリストのあれほどまでの苦しみ、十字架上での死が無駄に終わったとの証明になりはしないかという、キリスト教の教えの礎^{いしづえ}についての疑問を、十三歳のジャンヌは神に對してつきつけるのです。現実の人類の悲惨が見えすぎてしまうがゆえに、挑戦的な問いかけとならざるをえないのです。

2. オーヴィエットのこたえ

2-1. 日々の労働

こうしたジャンヌの問いに對し、ジャンヌよりさらに幼い女の子オーヴィエットがひとつのこたえを示します。戦争という悲惨な現実のただなかにあっても、できることがある、というこたえです。

オーヴィエット：ジャネット。ね、きいてよ。年とった人の話では、兵隊たちが勝手気ままに作物を奪い始めてからもうじき五十年がすぎってしまうのよ。熟れた作物を、兵隊たちが好き放題にふみつぶしたり、

13 同上, p. 371, 岳野, p. 46, 島, p. 127.

燃やしたり、盗んだりしてもう五十年たってしまうのよ。熟れた作物を馬の足で踏みつぶすのはましな方だったって。でもね、こんなことがあったあと、毎年、秋には、まじめなお百姓、あなたのお父さん、あなたの二人のお兄さん、あなたのお友だちのお父さん、いつもおなじ人たち、おなじお百姓、おなじフランスのお百姓たちが、おなじ心づかいをしながらおなじ土地で働いているのよ。神さまの前で、あそこの畠で種子を播いたりしてね。それがすべてを守っているんだわ。家が毀されれば、また建てるわ。教会、教会だって。教区が毀されれば、またつくり直すのよ。教区にはお休みなんかなかったわ。何もかも、こんなに滅茶苦茶になっても、礼拝、神さまを礼拝するのにお休みなんかなかったわ。それがすべてを守っているの。みんなりっぱなキリスト教徒だわ¹⁴。

壊されても壊されても、そのつど忍耐強く建て直す、そうした日々の労働によってこそ、現実の悲惨に対抗することができるという立場です。まじめな百姓、まじめな労働者が、悲惨の広がり、絶望の広がりをくいとめるとオーヴィエットは考えます。

オーヴィエット：あたしはまじめなキリスト教徒。まじめなフランスの女の子。神さまが収穫^{とりの}れを祝福してくださるためにはね、ジャネット、まずあたしたちが種子播きをしなくてはならないのよ。毎年、まず種子播きをするのはそのためよ。畑がよく耕されて、種子がきちんと播かれたら、あたしたちは、兵隊が来ないようにお祈りするのよ。新しい麦が生えて、穂をつけるようにお祈りするの。収穫れがふえるように、麦の穂が大きくふくらむように。あたしたちにできることはこれだけ

14 同上, p. 394, 島, p. 143-144, 岳野, p. 86-87.

だわ。あたしたちがしなければならぬのはこれだけよ。あとは神さまにおまかせするの。あたしたちは神さまのみ手のなかにいるわ¹⁵。

自分たちにできる仕事を一生懸命行えば、後はお祈りをして、神さまにおまかせする。十歳のオーヴィエットが神へ寄せる信頼は、明るく一点の曇り也没有。

2-2. 社会のなかで

オーヴィエットの立場は、あくまでも社会生活の枠組みのなかで、働き、祈ることを説くものです。これは、あとで登場する修道女ジェルヴェーズの立場と対立します。修道女は家族を離れ、社会あるいは俗世を離れ、神への祈りに身を捧げる存在ですが、オーヴィエットはそのような生き方に反感を覚えています。

オーヴィエット：(…) 神さまとのおつき合いで、誰かがほかの人よりずっと親しいなんて、そんな人いるもんですか。男の人の声、女の人のお父さん、お母さん、子どもたちみんなの声は、神さまのお耳にじかにとどくのよ。(…)

あたしたちも、洗礼を通して、あたしたちの洗礼を通して呼び出されたのね。よいキリスト教徒になるように、キリスト教徒になるように。それからまた、よい女の子になるように、お父さんお母さんをよろこばせるために、弟や妹の面倒をみるように¹⁶。

神へ祈るのに、なににも修道女になる必要はない。社会のなかで、家族のな

15 同上, p. 397, 鳥, p. 146, 岳野, p. 92-93.

16 同上, p. 389, 鳥, p. 140, 岳野, p. 78-79.

かで自分の役割を果たしつつ祈ることの方が重要だ、と説くのです。

2-3. 現世における人間イエス

その根拠を示すため、オーヴィエットはイエスの生き方を例にあげます。

オーヴィエット：イエス・キリストさまは修道院には入らなかったわよ。修道院なんかでお暮しにならなかったわよ。イエスさまは、お父さん、お母さんと一緒にお暮しになったわ。息子らしく。大工さんだったわね、お仕事は。そのあとだって引きこもったりなさらなかった、その反対でしょ。三年間、人びとのなかで教えるために出ていらっしやっただわ¹⁷。

人間として三十三年間生きたイエスは、人びとのあいだで、社会のなかで生きたという点を強調するオーヴィエット。ここには、信仰に支えられつつ社会生活に、社会的活動に一心に身を捧げることの重要性が説かれているのです。

3. ジャネットのもう一つの苦しみ

3-1. 共犯者の意識

ジャンヌの問いかけに対し、オーヴィエットは一生懸命自分なりのこたえを語ってくれましたが、そのことによってオーヴィエットの立場とは相容れないジャンヌの立場が一層鮮明になります。十三歳のジャンヌは、オーヴィエットには打ち明けられない悩みを、年上の修道女ジェルヴェーズにぶつけます。それは社会のなかに悪がはびこっているときに、悪そのも

17 同上, p. 391, 島, p. 141, 岳野, p. 81.

のには立ち向かわず、おのれの仕事だけに従事している自分が、悪の共犯者にほかならないという意識です。

ジャネット：いまは無駄な愛の業しかできないで…。私たちは、戦争を打ち滅ぼそうともしない。だったら私たちは、いま起きていることすべての共犯者なのだわ。(…)

なすがままに放っているのは、させているのとおなじ。おなじ、ひとつのこと。一緒に起こっているのだわ。なすがままに放っている人、させる人、それはどっちも手を下す人のようなもの。手を下す人とおなじだわ。(立ち上がる様子で)それは手を下す人より悪いわ。なぜなら、手を下す人は少なくともそうする勇気をもっているわ。罪をおかす人は、少なくとも、おかす勇気をもっているわ。そして、罪がおかれるがままに放っておくなら、罪はおなじ。おなじ罪だわ。おまけに卑怯だわ。その上に卑怯でもあるんだわ。

かぎりない卑怯がいたるところに。

共犯者、共犯者。それは罪をおかす人より悪い、かぎりなく悪いこと¹⁸。

3-2. 社会における孤立

共犯者であるという罪の糾弾は、自分に対してだけではなく、現行の社会の枠のなかで生きるまわりの人々すべてに向けられます。ジャネットが自分では口にできないその心の秘密を、修道女ジェルヴェーズが見抜きます。

ジェルヴェーズ：あなたはあの人たちが卑怯だとわかったのね、あなた

18 同上, p. 419, 鳥, p. 162, 岳野, p. 134-135.

が愛していた…あなたが愛してきたあの人たちが… (…)

自分で尊敬したいと思う人を、尊敬せねばならない人を、尊敬しようと思っている人を、尊敬している人を、蔑むなんて。

それは一ばん低劣、一ばん卑劣なことでしょう。

あなたは、あなたが愛していたあの人たちがみな卑怯だとわかったのね。あなたのお父さんが卑怯だと、お母さんが卑怯だと¹⁹。

鋭い批判意識の目覚めてしまった少女ジャンヌは、オーヴィエットのよう
に社会を信頼できず、周りの人々を無心に愛することができず、社会のな
かで精神的に孤立していました。悲惨な現実を根本から変えようとせずに
放置している社会、その社会の罪を知ったときから、周りの皆と同じよう
に感じたりふるまったりする事は、もはや不可能となったのです。

3-3. 滅ぶ魂を救いたい

ジャンヌにできることはなんなのか。破滅してゆく人々の魂を救うため
になにができるのか。自分を代わりに地獄へ落してほしい、ジャンヌの自
暴自棄ともいえる提案が飛び出します。

ジャンネット：ああ 永劫の焰から

苦悩に狂う地獄の人々の身体を救うため

私の身体を 永劫の焰に投込まねばならないのでしたら

神よ 私の身体を 永劫の焰に投げ入れたまえ²⁰

19 同上, p. 420-421, 島, p. 163, 岳野, p. 137-138.

20 同上, p. 426, 島, p. 167, 岳野, p. 148.

4. ジェルヴェーズのこたえ

4-1. イエスの受難 社会との対決

オーヴィエットには見せられなかったジャンヌの深い苦しみ、現行の社会のありかたを認められず、その粹からはみ出て地獄にまで飛び込んでいきかねないジャンヌの苦しみを受けて、こんどは修道女ジェルヴェーズが、別のこたえを紡ぎ出します。ジェルヴェーズは神の子イエスが人間として送った生涯を幻視しながら、歌うように展開させていくのですが、注目したいのは、オーヴィエットのとらえ方とは反対に、イエスがその使命によって社会の粹組みと対決したというとらえ方がここに強調される点です。

(ジェルヴェーズ：)

イエスはみなに愛されていました。

みなイエスが大好きでした。

イエスがその使命を始められた日まで。

幼な友だち、友人、仲間、権威者、市民も。

イエスのお父さん、お母さんは、

それをたいそう満足に思っていました。

イエスがその使命を始められた日まで。

幼な友だちはイエスを良い友だちだと思っていました。

友人たちは、良い友人と、

仲間たちは、良い仲間と。

高慢でない仲間と。

市民たちはイエスを良い市民と思っていました。

同輩たちは、一人のよい同輩と。

イエスがその使命を始められた日まで。

(…)

イエスがわざわざふつうの人と違った行為を実践し始められ、
わざわざふつうの人と違った行為を実践することによって、世間の
人々を混乱させた日まで²¹。

社会の枠のなかで暮らしている限りは、みなに愛され、いい息子、いい友人、いい市民であったイエスが、神の子としての使命を果たそうとしはじめたとたん、社会すべてを敵にまわしてしまった。使命を始める前と後との断絶が、完全な断絶が、くりかえし強調されます。イエスが十字架に架けられることとなったのは、社会を敵にまわしたがゆえです。社会を、世界を、人間を変えるというイエスの使命は、現行の社会、世界、人間との対決なしにはすまされず、単に父や母を喜ばそう、友人や同輩を喜ばそうとしている限りにおいてはできないことでした。修道院に入ることで母親を悲嘆にくれさせたジェルヴェーズ、親不孝者として村人たちやオーヴィエットを憤慨させたジェルヴェーズだからこそ、イエスの受難のうちに、社会的枠組みとの対決を、断絶を、深く感じ取ることができるのです。

4-2. イエスの受難 滅ぶ魂を救えない

しかし、ジェルヴェーズはこのイエスの受難をもってしても、地獄へ堕ちる魂までは救えなかったという残酷な証言をジャネットにつきつけます。

(ジェルヴェーズ：)

臨終のイエスは、人間としての死がご自分の身体にのぼってくるのを感じられたとき、

下で、十字架の真下で、涙にくれ嘆き悲しむ母には目をやりませんで

21 同上, p. 449-450, 岳野, p. 204-206, 島, p. 185-186.

した。使徒ヨハネにも、マグダラのマリアにも。
イエスはユダの死を思って涙を流されたのです。

イエスは、その死によって、わたしたちと同じ人間としての死によって、死なれながら、ユダの永遠の死を思って涙を流されました²²。

(…)

「神の御子」であられたイエスは、すべてを知っておられました。
そして、「救い主」イエスは、ご自分が愛するこのユダを、
ご自分をすべて与えても救えないことを、知っておられました。

そしてそのとき、イエスは限りない苦しみを感じられました。
そのとき、イエスは感じられました。そのとき、イエスは知られました。

そのとき、イエスは限りない苦悩を感じられました。
そして、狂人のように、恐ろしい苦悩の叫びを発せられました。
その叫びのために、まだ立っていた聖母マリアはよろめきました。

そして「父」のおんあわれみによって、イエスは人間としての死をとげられました。

なぜあなたは望むの、ジャネット、永遠の地獄に堕された死者を救おうなんて。救い主イエスがなさる以上に救おうなんて²³。

22 同上, p. 485, 鳥, p. 215, 岳野, p. 298.

23 同上, p. 488, 鳥, p. 218, 岳野, p. 305-306.

あの、有名な「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」——神よ、なぜ我を見捨てたもうか、というイエスの臨終の際の叫びを、ジェルヴェーズは、ユダの魂を救えなかった苦悩の叫びであると解釈し、神の子イエスにすらできなかったことを、ジャンヌが行おうなどと考えるのは傲慢であるとたしなめるのです。

4-3. 祈り

それでは、自分たちにできることはなにか。それはイエスの先に出ようとするのではなく、イエスの後について祈ること、苦しめるかぎり苦しむことである、これがジェルヴェーズのこたえです。

(ジェルヴェーズ：)

イエスは説教されました。イエスは祈られました。イエスは苦しみました。わたしたちは、わたしたちの力の及ぶかぎり、イエスを模倣しなければなりません。もっとも、わたしたちは神のように説教することはできません。わたしたちは神のように祈ることはできません。わたしたちは決して限りない苦しみをいただくことはできません。それでも、わたしたちは、わたしたちの人間としての全力をあげて、できるだけ立派に、神の言葉に従って祈るよう努力しなければなりません。わたしたちは、人間としての全力をあげて、できるだけ立派に苦しむよう努力しなければなりません。最後の苦しみまで、決して自ら破滅に走ったりせず。わたしたちに可能なかぎり。人間としての苦しみを。これが、わたしたちがこの世でしなければならないことです。もしも、わたしたちが、ほんとうに、他の人々が滅びるのを卑怯にも放っておきたくないならば。もしも、わたしたちが、わたしたちも、このように、他の人々といっしょに滅びるのを、卑怯に放っておきたくないな

らば²⁴。

渾身の力で祈ること、そしてあとは神さまにお任せすること、と説くジェルヴェーズの立場は、神を信頼し、神に任せる、という点において、これまで対立してきたオーヴィエットの立場と同じものになります。

5. ジャネットのこたえ

5-1. 目の前の悲惨

ジャンヌはどう応じるでしょうか。

ジャネット：それで、あなたのお祈りが役に立たないことがわかったら、修道女さま、そのときはどうなさる…？

ジェルヴェーズ：（激しく、声にならぬ叫びのように。叫びをかくすように）

祈りが役に立たないかどうか、決してわかりはしないのです。

（頬を紅らめ、すぐに気を取り直して）

というより、私たちは、祈りは決して無駄にならないことを知っています。イエスがあの「天に在します」を唱えられてから。はじめてイエスが「天に在します」を唱えられて以来。

（落ち着いて、しっかりと）

それがわからないとしても、それは神さまがなさることです。（…）

ジャネット：じゃ、苦しみは。

ジェルヴェーズ：祈りに応えてくださるように、苦しみにも応えてくださいます。

24 同上, p. 519, 岳野, p. 364, 島, p. 241.

ジャンネット：でも、キリストの国自身が、キリストの国全体が、だんだんと沈んでいくのはたしかだわ。一步一步、たしかに、滅びのなかに沈んでいくのがわかっているのに²⁵。

ジャンヌは、ジェルヴェーズのように、社会の枠を離れて祈りだけに身をゆだねる、ということもできません。それは目の前の悲惨をやはり放置できないからなのです。ジェルヴェーズは、キリストの国が仮に滅びに沈むとしても、それもまた神のみ旨であるとこたえますが、ジャンヌにはどうしても受け入れることができません。それこそが、オーヴィエットとジェルヴェーズとの対話によって導きだされてきた、ジャンヌ自身の立場となります。

5-2. 剣すなわち行動

オリーヴ山にて、イエスがついにユダの接吻を受け、武装した兵士にとりかこまれたときのことを、ジェルヴェーズが聖書からの直接的な引用をまじえつつジャンヌに語りかけるさなか、ジャンヌの口から大胆な言葉が滑り出ます。

ジェルヴェーズ：主は、ペテロが、武装した兵士たちにむかって、剣を抜くことをお望みにならなかったのです。戦いをしてはいけなのです。

「見よ、イエスとともにいた人々の一人が、手をのばして剣を抜いた…」

ジャンネット：じゃ、その人たちは剣をもっていたのね。

ジェルヴェーズ：かれらは剣をもっていたのです。「剣を抜いて大祭司のしもべに打ちかかり、耳を切り落とした」のです。(…)

25 同上, p. 523-524, 島, p. 244-245, 岳野, p. 373-374.

ジャネット：「そのとき弟子たちはみな、イエスを見棄てて逃げ去った」
のだわ。

ジェルヴェーズ：何を言うのです、ジャネット、あなたの言うことは女
の子らしくありません。

ジャネット：私ならきっと、きっと……。

ジェルヴェーズ：そう、きっと。何が、きっと、なの？

ジャネット：私がそこにいたとしたら、私はイエス様を見棄てなかった
わ、きっと²⁶。

ジェルヴェーズに傲慢の罪の危険を諭されながらも、ジャンヌはこの発言を曲げることなく、頑固に、幾度となくくりかえします。目の前で神の御子がいけにえにされようとしたら、それを阻止しようとせざるをえない、行動せずにおれないというのがジャンヌのあり方です。そしてまた、ジャンヌだけでなく、フランスの人々、自分の父も母も、オーヴィエットもジェルヴェーズ自身も、そして今は敵の立場にいるイギリスの人々も、キリストの国の人々は、イエス様をけっして見棄てられないだろうと言い張ります。これは、神の御子がいけにえにされるというほどの重みで目の前の悪を悪と認識できれば、現実の悲惨を直視できれば、これまでキリストの教えを受けてきたはずの人間は立ちあがらざるをえないだろう、行動せざるをえないはずだという、ジャンヌのキリスト教徒への期待と取れます。ただし、「剣を取る者は剣によって滅ぶ」というイエス自身のことばに背いてしまう矛盾も抱えているのです。

26 同上, p. 490-491, 島, p. 219-220, 岳野, p. 311.

まとめ

オーヴィエットの立場は、あくまで現在の社会の枠のなかで、神を信頼し、日々の務めを誠実にはたすということでした。ジェルヴェーズの立場は、社会生活の枠の外に出て、人間としての限界までこの世の苦しみを苦しみ、限界まで祈りに身を捧げ、あとは神のみ旨にお任せするというものでした。ジャンヌの立場は、苦しみ、祈りつつ、現在の社会を変えるために剣を取る、すなわち行動に出るというものです。その立場は、オーヴィエットとジェルヴェーズとの対話をとおして、明確にされました。ここに描かれるジャンヌは、敵の大軍をなぎ倒し、奇跡的な勝利に輝く英雄でもなければ、清浄なる世界に身を置いて心やすらかに人々を癒す聖女でもありません。ペギーがジャンヌの「愛（カリタス）」と呼んだもの、それは、人々の絶望や苦しみをあまりに強く感じるがゆえに無難な社会生活の枠に収まり切れず、泥のなかに、あるいは炎のなかに自分の身も魂も投げ出さずにおれないという、その衝動であると言えます。飢えや殺戮で死んでゆく幼子を見棄てることは、イエスをふたたび見棄てることにほかならないと感じるジャンヌの「神への愛」こそが、その後のジャンヌの使命につながるものとして描きだされたのです。今日、極右のグループがジャンヌ・ダルクの銅像のまわりに集結し、「フランス人のためのフランス」を訴えるとき、ペギーのジャンヌであれば、移民を見棄てるという発想そのものに抗して、必死で戦うにちがいないと思わされます。

ただし、この作品でペギーは、ジャンヌの立場が唯一正しくてオーヴィエットやジェルヴェーズが間違っているということを主張するわけではありません。この三者三様の立場は、どれもペギーのなかにある思いを示しており、ペギー自身のかかえる矛盾したあり方であると言えます。そしてこの矛盾したあり方は、何らかの大きな不正を、目前にはびこる悪を意識したとき、キリスト教徒であるなしを問わず、すべての人間がかかえこむ

ものでもあります。この作品では、ジャンヌとの対話を通して、逆にオーヴィエットやジェルヴェーズのあり方が光のなかに浮かび上がってくる、との言い方も可能となります。

幼いオーヴィエットの素朴な信仰のありかたが、けっして否定されているわけではないということを強調するため、少女の言葉を最後に引用しておきましょう。

オーヴィエット：なぜって神さまにつくられたものが遊んでいるのは、神さまのお気に召すのよ。女の子が遊んでいること、女の子の無邪気さは神さまのお気に召すのよ。幼い子供の無邪気さは、神さまの一ばん大きな栄光だわ。一日中、みんながすることは何でも神さまのお気に召すのよ。まちがってさえないければ。なにもかも神さまのもの。なにもかもが神さまとつながっている。なにもかも神さまの眼の前でされているのよ。一日ぜんぶが神さまのもの。お祈りぜんぶが神さまのもの。仕事ぜんぶが神さまのもの。遊ぶこともぜんぶ神さまのもの。遊ぶ時に遊んでいるなら。あたしはフランスの女の子、神さまをこわがらないわ、神さまはあたしたちのお父さまだから。あたしのお父さんはこわくないもの。朝のお祈り、夕方のお祈り、朝の「お告げ」、夕方の「お告げ」、一日三度のごはん、四時のおやつ、ごはんをおいしく食べること、ごはんのまえの感謝のお祈り、ごはんごはんのあいだの仕事、遊ぶときの遊び、楽しめるときの楽しみ。朝、起きたときのお祈り、それは一日のはじまりだから。夜、寝る前のお祈り、それは一日の終わりだから。はじめにお願いし、あとでお礼を言うのね。いつも気持ちよく。こういうことぜんぶのためなのね、あたしたちが地上につくられたのは、こういうことひとつひとつのためなのよ、ね²⁷。

27 同上, p. 395-396, 島, p. 144-145, 岳野, p. 89.

このオーヴィエットの素朴な、しかし希望に満ちた信仰のあり方を、ペギーはのちにキリスト教の三つの徳である信仰、希望、愛のうちのひとつ、「小さな希望という少女」と呼んで、もう一つ別の作品『第二美德の神秘の大門』を書くことになります。

オーヴィエット、ジャンヌ、ジェルヴェーズは、互いに対立しつつ補い合っているのです。三者には明らかな共通点があります。現実の悲惨を前にしたとき、三人のうちの誰ひとりとして、「それは神が罰を与えているのだ」との解釈に立たないところです。たとえばアルベール・カミュの小説『ペスト』(1947年)において、登場人物のパヌルー神父は、第一回目の説教で、疫病の蔓延は神の下した罰であると説き、人々の改悛を促そうとします²⁸。しかし、ペギーのこの作品においては、戦争という悪によって世界が減びゆくのも神意かもしれないというジェルヴェーズでさえ、神意は測りがたいものであるから、とにかく人々の救いを求めて祈ることのできる者が祈るのだという姿勢を貫きます。思えばジェルヴェーズは、ユダをも地獄から救いたいと願いつつ人間としての死を迎えたイエス・キリストの姿を語ったとき、みずからも主の苦悩に胸をかきむしられていたのではないのでしょうか。三人の信仰のよってたつのは、いずれも預言と律法の時代の「罰する神」ではありえず、イエスとして受肉した「愛する神」なのです。ジャンヌの挑戦的な問いかけも、相手は「愛する神」であるとの前提があるからこそ、湧き起こってきたのであり、それがまたジャンヌ自身の「愛」として、奔流のようにジャンヌを押し流してゆくことになるのです。

28 この点については、発表後のディスカッションの際、金承哲先生にご指摘いただいた。